

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 2 5 年 6 月 3 日現在

機関番号：51303

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23650379

研究課題名（和文） 昭和戦時期、福島県浪江実科高等女学校の女性柔道の展開過程

研究課題名（英文） Development Process of Women's Judo at Fukushima Prefectural Namie Practical Girls' High School during the Showa Wartime Period

研究代表者

名久井 孝義（NAKUI TAKAYOSHI）

仙台高等専門学校・総合科学系・名誉教授

研究者番号：40100755

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、昭和戦時期における浪江実科高等女学校の女性柔道の実態を明らかにして、15年戦争下での女性柔道の特徴を提示することにある。

研究の結果、以下のことが明らかになった。1)同校の女性柔道は、学友会傘下の部活動として校長と講道館有段者の指導の下で、柔道の技の向上と活動的な女性（「板額」的女性）を目指して、生徒の自主的な参加で運営されていた。2)柔道部は、講道館と朝日新聞から画期的な存在として論評されていた。3)1942年以降、非常時下に巻き込まれる浪江と講道館の活動を比較すると柔道部の活動は、隣り合わせる戦時下から一時的に離脱させるスポーツ空間で、平時の活動だった。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted to reveal the actual status of women's judo in Namie Practical Girls' High School during 15 years of war in the Showa period.

Results of the study revealed the following: 1) Women's judo in the school was run with students' voluntary participation as a club activity of the students' association, which aimed at the improvement of judo technique and the activity of women ("Hangaku"-like women), under the coaching of the principles and the Kodokan *dan* holders. 2) The judo club was regarded by Kodokan and the Asahi Shimbun as a revolutionary phenomenon. 3) If comparing the activities in Namie and Kodokan when plunged into an emergency situation in 1942 and thereafter, then the judo club activities were peacetime activities conducted in a sports space, which temporarily enabled participants to break away from the prevailing wartime environment.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：柔道・女性・昭和戦前期・事例研究

1. 研究開始当初の背景

昭和戦時期の女性のスポーツ史研究は立ち後れているが、それでも概論的研究¹や女性に絞った研究²があり一定の進展をみせている。しかし、一面でスポーツの実践的歴史的事実は、生活に密着して地域とのつながりのもとで成立している。戦時下を踏まえつつ地域を加味した女性スポーツ史研究が課題

として残されている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、昭和戦時期における浪江実科高等女学校（現在の福島県立浪江高校、以下、浪女と略す）の女性柔道の実態を明らかにして、柔道・女性・戦時期をキーワードに15年戦争下での女性柔道の特徴を提示す

ることにある。

3. 研究の方法

研究の方法は(1)歴史資料の分析(2)生存者からの聞き取り(3)現地踏査である³。

4. 研究成果

(1)浪江町と浪女の概要

浪江町は、福島県の浜通り地方に位置し、常磐線（開通：1898年）と国道6号線の幹線交通網が整備され、林業や漁業などの第1次産業のほかに陶器業を中心とする商業の町で、昭和期の人口は約2万人であった⁴。

1927年に浪江小学校に併設して創立された浪女（創立当初：町立で定員40人）は、第二次世界大戦前（以下、戦前と略す）に福島県下で最後に開校した女学校である。当時の浪江町には6つの小学校（1926年の男女合計児童数：約2500人）があり、進学女子児童は浜通り地方にある3つの女学校などに進学できたが、浪女の開校により女子児童の中等教育への道が開けた。浪女の生徒は、同町と他町村出身者半々（1928-1931）で、定員増のために修業年限4年の定員100人（1934年）に改組し、1939年頃から定員を上回る志願状況となり、1943年に福島県に移管され県立浪江高等女学校となっている⁵。上記のように浪女に進学すること自体稀なことで、生徒は将来地域やそれを越えたところで活躍することを期待されていた。

(2)浪女柔道部の実態

浪女の女性柔道は、学友会（創設：1928年）の下部組織の「部組織」として営まれていた。学友会は身体運動の充実を図るために1935年に部長を任命して「部門制」を設けたのを契機に「柔道部」を創部（1935年⁶）した。このとき、柔道部以外に「排球」「籠球」「庭球」「水泳」の4部が創部され、全校生徒は部に所属しなければならない制度であったが、活動参加の強制度は緩い形態であった⁷。他の部に比べ活発であった柔道部の存続期間⁸は、1940年までの6年間（表1参照）であったが、その特徴は以下の5点にまとめられる。

写真（写真1・2参照）や証言者2の証言から柔道部は、イベント的・一時的な活動ではなく日常的な活動（稽古）を継続し、その一環として講習会や寒稽古を組み込んで活動していた。その成果が完成度の高い技の修得であり、部員の脇坂光子（当時4年生、以下同じ）の背負い投げ、青木清子（2年生）の巴投げ、小林恵似子（1年生）と栃木ふぢゑ子（4年生）の大外刈り、鈴木さだ子（1年生）の足払いなど多様な得意技の出現とな

っている。外部への発信を加味して柔道部の活動をおさえると「強制された身体」ではなく、生徒が技の巧拙に挑戦する主体的・主体的に取り組んだ活動であった、と読み解くことができる。

写真1



雑誌『柔道』7-9（1936年）より。

備考）前列の8人の帯は講道館女子部の帯

表1 柔道部中心の略年表

年	事項
27	・浪女が創立される ・春季遠足（請戸方面）が行われる ・上ノ原で運動会を行う
29	・校友会が創設される
35	・校友会に運動部各部門を設けて部長を任命して組織の充実を図り、部門として柔道部を創部する
36	・浪女で第1回女子柔道講習会を開催する ・雑誌『柔道』に掲載される
37	・寒稽古を行う（1週間） ・寒稽古「納会試合」を行う ・雑誌『柔道』に掲載される ・女子柔道護身術を行う
38	・寒稽古、町理事者・町議が来校して視察する ・百足ら3人が講道館に入門する ・校内で講道館免許状伝達式を行う。
39	・寒稽古を行う。同日に3・4年生の射撃演習を行う（学校行事） ・百足と小林が講道館女子柔道指導者講習会に参加する（1週間）
40	・寒稽古を行う
41	・校内体練大会を行う ・体力検定が行われる
42	・第1回鍛錬行軍が行われる ・明治節、浪江町民鍛錬大会が行われる

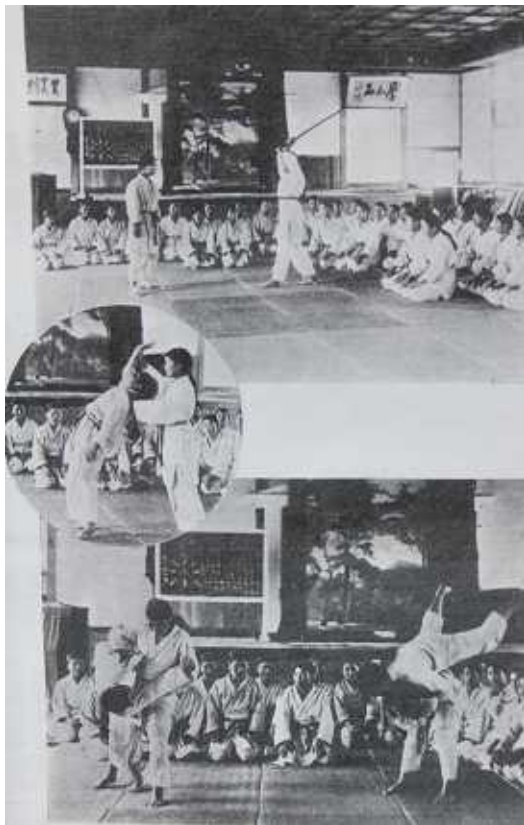
備考）年は西暦で1900年代。学校誌と雑誌『柔道』から筆者作成。

柔道の指導者は、校長の根本貞治・講道館高段者の鈴木末治郎ら柔道の専門家⁹であった。まさに講道館柔道経験者がレベルの高

い部活動に押し上げ、地域や講道館などに女性の柔道を発信した。

戦前の講道館柔道は男性中心の世界であり、女性の活動は講道館女子部やそこの結びつきのある限られた地域で行われる稀な世界であった¹⁰。したがって、立ち上げから約2年間の柔道部は、講堂¹¹の窓に暗幕を引き外部を遮断した「閉ざされた空間」での活動であったが、創部から3年後の1937年には「土用稽古からは一般の見学を許す」意向を示し、事実、1938年の寒稽古には「町理事町議来校視察¹²」に訪れ「開放された空間」へと展開した。

写真2



雑誌『柔道』7-9(1936年)より。

上)極の形「切下」か精力善用国民体育「極式」、円中)柔の形か精力善用国民体育、下)乱取(以上、講道館村田さんの助言による)

地域への開放に留まらず部員たちは外の世界に飛び出した。1938年には青木清子(4年生)・林潔子(4年生)・百足恭子(2年生)が講道館に入門¹³したほかに講道館から免許状¹⁴を授かり、その翌年には百足と小林(3年生)が講道館「女子柔道指導者夏期講習会」(1週間)に参加し、形試験を受験して小林は「単独動作」と「相対動作極式」、百足は

「相対動作極式」を修得¹⁵して技習得への熱意と浪江という地域から越境した生徒の一端を知ることができる。また、講道館では禁止されたとされている試合を部内の「紅白試合¹⁶」というかたちで実現して、一面で講道館をこえた展開をみせている。

柔道部の活動は柔道に魅せられた家庭的な支援を受けた限られた生徒だけの活動だったのだろうか。それは否であり、全生徒(約250人)の1割以上(30人から50人)が柔道部に入部¹⁷し、寒稽古納会試合や校内イベントには制服姿の生徒が観戦している。ここからは、学友会の支持や一般の生徒からの熱い目差しがみてとれ、部員全員が柔道衣を纏ってる写真から保護者や地域から支持された活動であったことは間違いない。しかし、沿革誌では1940年の寒稽古の記録を最後に柔道部の記録は途絶える。記録から途絶えた直後に入学した証言者³¹⁸からの聞き取りでは、柔道部存続の証言は得られなかった。

(3)浪女柔道部の史的位置づけ

生徒の言説ではなく活動の文字的記録と残された写真及び生存者の証言から技に傾注する部員の身体と精神を読み解いたが、15年戦争下の日中戦争のただ中で彼女らに求められた女性像は何であったか、また柔道部の活動が社会的に如何に評価されたのだろうか。

表2 体育的行事を中心とする行事の初出と消失

行事			場所など
遠足	27	42	請戸・夜の森
十日市食堂・展覧会	27	41	
運動会	28	40	上ノ原・校庭
体操・含むラジオ体操	28	42	
競技	28	39	校庭・上ノ原
小学校運動会見学	30	37	津島除く5校
水泳(含む海水浴)	30	40	請戸
浪江町体育大会	31	41	
修学旅行	33	42	東京・関西など
排球部練習試合	35	39	対原実女
実弾射撃演習	37	40	上級生・丈六
勤労奉仕	38	不	
錬成・修錬関係	42	不	
行軍	42	不	請戸・三枚岩
待避訓練・含む壕堀	43	不	

備考) = 初出年、 = 消失年、年は西暦で1900年代。柔道関係を除く。不 = 不明
中断の場合あり。学校誌から筆者作成。

浪女は「知性と優雅」を校是としてきた。戦前の女学校教育の理念を良妻賢母で括ら

れる場合が多いが、浪江町の伝統的イベントである十日市¹⁹での食堂やバザーの開設(表2参照)や家政的講習会(1929~1939)などにみられるように浪女もその例外ではなかった。これに加えて根本校長は、旧習をこえた「我国女性の第一線に立つて…家庭教育の振興を図つて善良なる家庭²⁰」の創出と自力更生の原動力として、より活動的な女性役割を期待した。その延長線上に小学校の運動会でのダンスの披露²¹の継続(1930-1937)や学友会改組による各運動部の創部が位置づけられる。柔道部を記事にした雑誌『柔道²²』の比喻を援用すれば、日中戦争下で大陸進出を支える気丈夫な「板額」的女性ということになる。

既にみたように柔道部は校内的・地域的に支持されたが、雑誌『柔道』では「女子柔道界に力²³」となる画期的な活動と好評で、また朝日新聞では、柔道も取り上げつつ浪女を「宛然体育校の浪江実科高女²⁴」と小見出しで評価していた。しかし、この新聞が発行された年に沿革誌から柔道の記録は消失する。

1939年に武道が小学校(男子)に正課として組み入れられ、講道館での「女子護身法研究委員会²⁵」の立ち上げや隆盛とは言えないが講道館女子部以外での女性柔道への積極的参入などを踏まえると柔道部の消失は理解に苦しむ。根本校長の退職(1941年)もその一因になっているかも知れないが、1941年6月26日の沿革誌に「修学旅行」と「無言凱旋兵士駅頭慰霊祭しきり」と併記され、浪江は15年戦争末期の非常時に急変し、秋の運動会が「体練大会」、かつての請戸などへの遠足が鍛錬行軍(1942年)へと軍事体制に包摂され²⁶、勤労奉仕の続く日常(表2参照)や1944年の空襲警報の発令、同年の横須賀海軍廠への上級生の勤労働員と挺身隊の出動にみるように、生産線を支える女性性や身を守り生きる術だけに翻弄される浪江の非常時が柔道部の消滅を促した²⁷、と読み解くことができる。

(4)まとめ

浪女の女性柔道は、学友会傘下の部活動の1つとして行われていた。1927年に創立された浪女は、その1年後に「学友会」を立ち上げ、1935年に改組して5部からなる下部組織を編成した。その下部組織として「柔道部」も創部された。柔道部は、当時の校長と講道館有段者の指導のもとで、柔道の技の向上と旧来の良妻賢母をこえた活動的な女性(当時の資料では「板額」的女性)を目指して、生徒の自主的な参加により営まれていた集団であった。

浪女柔道部は、1937年の雑誌『柔道』に「女子柔道界に大きな力を与える」学校として取り上げられ、また、1941年の朝日新聞に「宛然体育校の浪江実科高女」として論評される体育に秀でた学校であり、柔道部もその一翼を担い、昭和戦時期の女性柔道界で画期的な存在であった。

柔道部消滅(1941年)後の浪女の生徒は、軍事色を帯びた教育活動(特に1942年頃から)部活動以上に戦時下での生きる術の実践に追い込まれた歴史的な教育状況と本土防衛戦(銃後の護り)を前提にした講道館での「講道館女子柔道護身法」の制度化(1943年)を踏まえると、それ以前に存在した浪女柔道部の活動は、15年戦争の戦時下ではあったが、1944年に女子護身法を体験した晩香高女の生徒の感想にみるような敵意をあらわにした悲壮感²⁸はなく、柔道の技を磨くことに傾注した活動的な女性を育む「平時²⁹」の活動で、隣り合わせる戦時下から一時的に離脱させる、彼女らにとってまさにスポーツ空間であった、と読み解くことができる³⁰。

河西英道の研究にみるように15年戦時下での地域の動向は画一的ではなく、本研究でも戦時下での柔道の多様な一面を示していたことが判明した。今後、浪江以外での事例研究により講道館を含めて戦前の柔道の全体像の解明が課題として残る。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

名久井孝義「昭和戦前期、浪江実科高等女学校の女性柔道の展開過程 - 雑誌『柔道』・浪江高校沿革誌にみる校友会柔道部の位置づけ - 」スポーツ文化研究会、2013年1月26日、一橋大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

名久井 孝義 (TAKAYOSHI NAKUI)
仙台高等専門学校・総合科学系・名誉教授
研究者番号：40100755

註

1)岸野雄三・竹之下休蔵『日本近代学校体育史』日本図書センター、1983年。入江克己『昭和スポーツ史論』不昧堂、1991年。山本信良・今野敏彦『大正・昭和教育の天皇制イデオロギー』新泉社、1986年。入江克己『日本ファシズム下の体育思想』不昧堂、1986年など。

2)最近の研究では、中村祐司「戦時下の女子体力章検定」『女性スポーツ研究』第6号、1994年。鈴木楓太「戦時期のスポーツとジ

エンダー『一橋大学スポーツ研究』第31巻、2012年。鈴木楓太「女子体力章検定の制定過程」『体育史研究』第30号、2013年など。

3) 浪江町は2011年3月の東日本大震災と原発事故で全町避難を強いられている。2013年4月に海岸沿いの一部地域が避難指示解除準備区域となったが、町の大半が居住制限区域と帰還困難区域で、現在も倒壊家屋など避難時のままの状態である。いわば非常時下のなかで同窓会員への連絡や立入り制限区域への踏査に献身的に協力いただいた齋藤和子(現在、同窓会長)さんご夫妻、避難先での聞き取り調査を快諾していただいた同窓生4人と旧制双葉中学卒業生1人の方及び学校誌の閲覧を快諾していただいた高梨洋史さん(前浪江高校校長)に感謝したい。福島県立図書館・講道館・スポーツ文化研究会など7つの機関と村田直樹さんと本橋端奈子さん(両者講道館)ほか多数の方々から協力と助言を頂いたことに謝意を示したい。

4) 『浪江町史』(浪江町教育委員会、1974年)、『浪江町近代百年史』(第1集・第2集、浪江郷土史研究会、1984年)(以上福島県立図書館蔵)及び『浪江・小高の歴史』(東北電力(株)浪江・小高地点原子力準備事務所、発行年不詳・1990年か、南相馬市図書館蔵)を参照。

5) 『福島県教育史第5巻』(福島県教育委員会、1975年)及び『同窓会報第2号』(福島県浪江実科高等女学校同窓会、1933年)(以上、福島県立図書館蔵)を参照。

6) 雑誌『柔道』(第8巻第3号、23頁、講道館文化会、1937年、以下、『柔道』巻-号、頁、発行年で表記。雑誌『柔道』は講道館所蔵)での同校柔道部の創部が1936年だが、浪江高校『沿革誌』(福島県立浪江高校蔵)の創部年とした。『沿革誌』は2冊あるが、浪江高校の校名入り罫紙に手書きされているから、戦後に沿革誌原本から写されたと考え。戦前の分だけで約800強の事項が記載されている。

7) 同窓生(証言者1)(在籍:1936年~1940年、以下、期間は年-年で表記)は、排球部の所属で活動への参加は少なかったと。また、柔道部の生徒を「かっこいい」とみながら「ほんなことやるひと」と、お転婆的な女性との見方をしていた。また、同じ時期に在籍した証言者2(1936-1940)は、「排球部」の活動に積極的に隣接の原町実科高等女学校(現在の原町高校)との練習試合にも出ている。朝日新聞(1941年2月12日と16日付、その調査年月日は不詳、国会図書館蔵)に「柔道部」の他に「馬術部」が記録されているが、「馬術部」については、証言者(4人)から存在の証言、さらに沿革誌にも記載されていない。

8) 沿革誌での柔道部の記録は「柔道寒稽古」

(1940年2月3日)で終わっている。

9) 根本貞治(在任期間:1932-1941、生没年:1885-1980)は福島師範(現在の福島大学)卒業後、終戦間際に内郷町長の職にあったが、戦前戦後を通じて福島県教育界に貢献し、1937年の時点で講道館柔道二段である。鈴木末治郎(生年:1892-没年不詳)の詳細は定かでないが、旧制双葉中学と小高実業(在任期間:1931-1945、現在の小高商業高校)でも柔道を教えていた。1943年に講道館柔道六段に昇段する。(以上、『明治百年福島県教育回顧録』福島県公立学校退職校長会、1969年、福島県立図書館蔵及び『柔道年鑑』講道館、1939年、講道館蔵などを参照)。

10) 「講道館女子部(競技化以前)-戦前史-」(執筆担当:名久井孝義)『講道館百三十年沿革史』講道館、371-380頁、2012年

11) 当時の講堂の場所は、二方を道路に囲まれた校地の角(避難前の浪江小学校プールの場所で正門の脇)にあり、当時の浪女は同小学校に併設されていたから人目に曝されやすい状況にあった。

12) 前掲註6『沿革誌』

13) 講道館誓文帳(講道館蔵)。誓文帳の分析・報告については、拙稿『近代日本におけるスポーツにみる性差の創造と変革に関する基礎的研究』(研究課題番号15510230、付録1-10頁、2006年)を参照。

14) 浪女では1938年10月に「講道館免許状伝達式」を行っている。誰が「講道館女子部段級規則」(1934年制定)の如何なる資格を得たかは定かでない。なお、写真1の最前列の8人の生徒は講道館女子部の帯を締めている。

15) 『柔道』10-9、口絵・33頁、1939年。講習会は講道館で1週間行われているから、女子生徒の東京での宿泊を伴う活動に対する保護者と学校関係者の理解があった。また、百足を知る同級生の証言者2は、この講習会参加を鮮明に記憶し、活動熱心な百足を誇らしげに語っている。

16) 『柔道』8-3、口絵・23頁、1937年。口絵の写真には「点取り表」が写っている。

17) 『柔道』7-9、11頁、1936年及び前掲註6『沿革誌』

18) 証言者3(在籍期間:1941-1945)

19) 十日市は浪江町の伝統行事で、東日本大震災・原発事故で全町避難を強られるなかで避難先の二本松駅前で開催されている。1941年を最後に沿革誌に記録されていないところをみると、浪江でも太平洋戦争に突入した頃が急変の時期とおさえてよい(表2参照)。

20) 前掲註5『同窓会報第2号』巻頭言

21) 沿革誌には「請戸小学校運動会見学」などの表記になっているが、証言者2は「愛国行進曲」でダンスを披露した、と証言している。

22)前掲註 16

23)前掲註 17 『柔道』 11 頁

24)朝日新聞(1941年2月16日付、国会図書館蔵)。朝日新聞では、浪女を如何なる観点から論評したかは定かでないが、浪女が福島県下女子中等学校体育大会に出場した形跡はない(隣接校の「原実女」は1940年に排球で出場、『福島県体育協会六十年史』(財)福島県体育協会、131-150頁、1990年)。朝日新聞の記事分析については、前掲註2鈴木「戦時期のスポーツとジェンダー」を参照。

25)『柔道』11-12、45頁、1940年。講道館は1943年に「講道館女子柔道護身法」を制度化する。

26)中村は「天皇に対する論理的忠誠と結合した『皇国民』の義務になった」と。中村祐司「戦時下の『国民体育』行政」『早稲田大学人間科学研究』5-1、124頁、1992年

27)証言者3は、1941年に入学して3年生の時に勤労働員に加わっているが、女学校生活は部活どころではなかった、と証言している。なお、旧制双葉中学に在籍し柔道指導者鈴木を知る証言者4よれば、浪江でも非常時になるのはガダルカナル島での戦いあたりからで、親戚や集落からの出兵者の武運長久を近隣の神社で祈った、とのことである。

28)前掲註13名久井、付録2頁

29)「少年柔道指導試演」(『柔道』11-2、43頁、1940年)に掲載された南郷次郎(講道館第2代館長、生没年:1879-1951)の語り「剣や弓は戦には必要だが、柔道は無手だから平時に斯の如き威力を発揮する」を援用した。もちろん、浪女でも15年戦争下で戦時色の濃い「海軍記念日」などでの講演や遙拝が少なからず行われ、1939年1月25日の沿革誌には寒稽古と突弾射撃(1937・38・39年に3回行われ、証言者1からの証言も得ている)が併記され、3・4年生は射撃場の丈六公園に出かけた(表1・2参照)。しかし、太平洋戦争以後の毎月繰り返される「興亜奉公日」(初出:1941年、後に「大詔奉載日」)での神社参拝などの行事、戦死者の無言の帰還、空襲警報発令と防護団の演習や連日の勤労奉仕は、彼女たちに身をもって「平時」ではない「非常時」を自覚させたことは間違いない。

30)日中戦争下での浪女柔道部を理解する上で「戦争は日々の生活のすぐ隣におとなしく立っていた」(河西英道『せめぎあう地域と軍隊』200頁、岩波書店、2010年)との指摘は参考になった。